

すき ♪ すき ♪ からすき

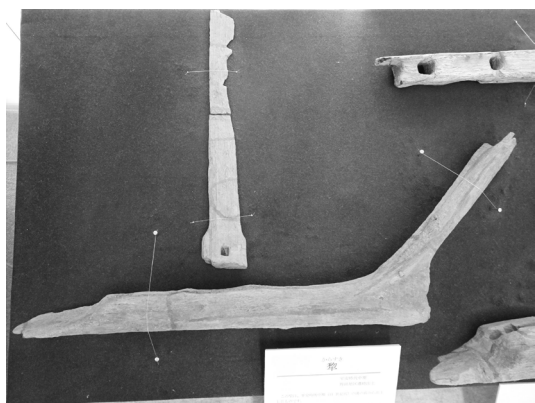


田んぼにお水が入るまで！

今からおよそ50年前まで、和歌山の田んぼでよく使われた農具の一つに「カラスキ（犁）」があります。機械化する以前の稲作や畠（はたけ）の作業では、農家で飼われた牛にこの道具を引かせて、田んぼや畠の土をすき起こすことが行われましたが、じつはこの農具の歴史は古代にまで遡ります。

カラスキは、「大化の改新」が行われた7世紀中頃に、大和政権による農業技術改革により中国大陸から日本へ本格的に導入されたことが、近年の研究によって明らかになってきました。もともと古代の渡来系農具であったカラスキは、その後、およそ1300年ものあいだ基本となる形が代々受け継がれ、紀州の稲作に欠かせない農具として定着していきました。

この企画展では、長いあいだ和歌山の農家の仕事の傍らにあり続けた鋤（すき）・鍬（くわ）・犁（からすき）などの農耕具について、県内の民俗資料および考古資料をあわせて展示し、知られざる紀州の農具の歴史を振り返ります。とくにカラスキについては、古い形とされる長床犁（ちょうしょうずき）に焦点を当て、その地域的な特色や、技術の移り変わり、耕作や牛に関わるくらしや信仰などについて紹介します。



野田地区遺跡から出土した平安時代のカラスキ
(有田川町教育委員会蔵)



紀北地域のカラスキ
(紀伊風土記の丘蔵)



御坊周辺のカラスキ
(御坊市歴史民俗資料館蔵)



木本八幡宮の御田祭
(和歌山市西庄)